

大会講演

10回目の開催となった恒例の伊香保短歌大会は、2011年5月19日に伊香保温泉ホテル天坊にて、初参加の方々の姿も多く見られる中、行われました。

和倉温泉短歌大会は、7月28日、能登半島の拠点である和倉温泉観光会館にて、4回目の大会を開催しました。

NHK学園生涯学習フェスティバル

●伊香保短歌大会

と き／二〇一一年五月十九日（木）

と ころ／群馬県渋川市・伊香保温泉ホテル天坊

演 題 わかりやすくして深い歌

講 師 馬場あき子先生……3

●和倉温泉短歌大会

と き／二〇一一年七月二十八日（木）

と ころ／石川県七尾市・和倉温泉観光会館

演 題 河野裕子と私

講 師 永田和宏先生……15



「わかりやすくして深い歌」

馬場あき子

関東のかるたと関西のかるた

皆さん、こんにちは。今日はお天気も良くて、本当はその辺りを散策して歌を作ったほうがいいかなと思うぐらいです。その前提になるような「わかりやすくして深い歌」、難しいですよ。私もこういう歌を理想としているのですが、なかなか作れません。作れないけれど、そういう歌の伝統ってなかったのだからかと思いました。

私は「いろはがるた」が好きで、皆さんのお手元にある資料にも「いろはがるた」を四つ書いてきました。関東と関西では、言葉の文化の伝統がずいぶん違うんです。京都には長い伝統があります。短歌にも千何百年という長い伝統があります。関西は言葉がとても発展していたんです。

その頃の関東は、まだ田んぼが徐々に増えていくような時代でしたから、言葉の文化というのは、あまりなかったでしょうね。ですから、この「いろはがるた」というのは比較的新しい江戸時代のものというわけです。

まず関東の「い」を見て下さい。面白いんです。例えば、私たちが子どもの頃「犬も歩けば棒に当たる」という札を取りました。「いろはがるた」を取ったことがある方、ちょっと手を挙げてみて下さい。半分ぐらいしかいらつしやらないですね。皆さん、真面目だったんですね（笑）。私は、お正月には遊びほうけていました。家中にいとこたちがたくさん集まって、「いろはがるた」を取る。「犬も歩けば棒に当たる」というのは、読んですぐにわかる。言ってみればわかりやすい歌、わかりやすい言葉

ですよ。

しかし、どこがわかりやすいのかというと、野良犬がふらふらとその辺を歩いていると、人間が出てきて棒でコチンとやるので「ふらふらしていると棒で叩かれるよ」ということが一つあります。そう考えてもいいのですが、なにが違うような気もするわけです。でしゃばつてうろうろとやっていると、怖いところから「このでしゃばり者！」と言われる、棒に当たつてしまふ、「お上は怖いよ」という戒めのような気持ちにも取れますね。お巡りさんも警棒を提げていますが、みんな棒には当たりたくないわけです。「犬も歩けば棒に当たる」、絵に描いたように、漫画のように姿がわかりますね。「この絵を描いて下さい」と言ったら、みんな描けるでしょうというくらい場面がくつきりしているんです。しかも内

容が二つ、実際にうろうろと歩いていると痛い目にあうということですが、非常に即物的で怖い意味にも軽い意味にも受け取れます。

最近、「面白い話を聞きました。この頃は引っ込み思案の人が多かったので「犬も歩けば棒に当たる」という意味が変わってきたそうなんです。「犬だつて歩けば何かにぶつかる。だから家にいたのでは何にもぶつからないよ。外に出て何かをやりなさい」という意味に取っている人もいるというのです。ずいぶん違ったものだと思います。

ところにもかくにも、「犬も歩けば棒に当たる」——映像はぼつちり、内容もすぐわかる。これは即物的だからということですよ。物に即している、漫画チックだけれど映像が非常にくつきりとしています。そういう即物的なわかりやすさがあるんです。わからない人が誰もいないという、わかりやすい言葉をもっています。

ところが、同じ「い」でも関西のほうを見て下さい。「一寸先は闇」となっています。これはどういうことかちょっとわからないでしょう。

私は親がいなくて、おばあちゃんが仕事をしながら育ててくれました。そのおばあちゃんが、夕方にキセルでタバコをのみながら、タバコをポンと叩いて夕暮れの空の向こうのほうを見ながら、「一寸先は闇やなあ」と言っていると、なんだか怖いものが来そうな感じがしたものです。ですが、これには形象がありません。漫画チックな即物的なものが何も出てこない。「一寸先は闇だ」、これには非常に抽象的な深さがありますね。「闇」という言葉が怖いものを感じさせる。一寸先にはどんな運命が待っているのかわからない、それが人間の世の中だということですよ。今回の震災もそうですよね。東日本大震災はまさに「一寸先は闇」だったわけです。そういう運命性を感じさせますが、ここには具象的な形がなく、抽象なのです。

どちらのほうが高いのだろうと考えると、やはり関西の「一寸先は闇」というほうが深い。深いけれど、なかなかよくわからないところがあります。わからなければ、いくら言っても言葉は言葉にならないわけですから、具象的なわかりやすさと、

抽象的な精神や事柄や、さまざまなもの深さというものが一緒になればわかりやすくして深い歌になるでしょう。それで私は、子どもの頃取ったこの「江戸かるた」と、「上方かるた」を合わせればいいなあ、とずっと思ってきました。

次に「論より証拠」、こんなにはつきりしたことはありません。理屈ですけれどもわかります。わからない人は一人もいない。最近、犯罪が多いので「論」をやるよりも「証拠」をみせなさいとなります。証拠万能になってきたわけです。「論より証拠」ですね。

ところが、関西のほうはもう少し難しいことを言っています。「論語読みの論語知らず」です。これは、論語をいくら読んで「子曰く……」とやってみても、先生は生徒に教えるばかりで、ちっともその内容や意味を実行していない。論語を読んでも、論語の本当の精神や主旨を実践することを知らないということです。論語を読んだら実践しなさいということを行っています。これは批評であり批判です。関西のほうが



痛いすね。「あれは、論語読みの論語知らずや」と言われると、ちくつと痛いわけです。

関東のかるたも関西のかるたも、実は大店の旦那さんが自分のところで雇っている、十二、三歳の丁稚小僧たちに教えるためのものだったのです。このかるたを取らせて「犬も歩けば棒に当たるんだぞ」と言っていると、なんだかわかる。「一寸先は闇なんや。氣いつけや」と言っていると、わかるんですね。抽象的でも、こうやって音声に乗った時にわかる言葉があります。

次はもつとわかります。「花より団子」というのですから、こんなにわかりやすい

ものはありません。だいたいの方は「花より団子」、歌詠みだけが「団子より花」かしら？ これもやっぱり嘘ですね。団子のほうがちょっといいかな（笑）。団子というのは、本当の団子ではなく、花よりも団子というように対比できますが、もしかしたら「団子」には袖の下という意味も含まれているかもしれません。賄賂も団子なんです。きれいな言葉よりも団子のほうがいい。面と向かって褒めてもらうより、団子を貰ったほうがいいという人はいっぱいいるかもしれません。「風流な花よりも実質的なほうがいいぞ」という、いかにも江戸商人らしい、率直なわかりやすい言葉です。

同じ「は」が、関西ですと、「針の穴から天井をのぞく」というのです。小っちゃい小っちゃい針の穴から天井をのぞいたらろくなものは見えない。だから、お前の小っちゃい小っちゃい立場から大きな大きな世間をのぞくことはできないから、もつと広い世間を勉強しなさいよということを抽象的に教えているわけです。「針の穴から天井のぞく」なんて極端な例ですよ。小

から大へということ。「井の中の蛙大海を知らず」と言いますが、それと同じようなことを言っているわけです。このように、関西のほうに少しづつ抽象が入ってくるのです。

関東の具体的な即物的な比喩。これが大事なところです。日本人は比喩が弱いというけれど、江戸かるたは全部を比喩によって教えていたことになります。直接ものを言うことが怖い時代に、比喩で世間を教えたい「いるはがるた」。それが「犬も歩けば棒に当たる」であり「論より証拠」であり、「一寸先は闇や」と、こういうことだったのです。

昭和三十三年から三十五年

日本の短歌の世界は、浪漫系の次にリアリズム系の短歌が隆盛を迎えました。リズムという少し意味が違いますね。写実でなければ短歌ではないという考え方がありました。でも写実だけが短歌ではありません。むしろ、関西の文化の深い辺りでは、抽象的にものを言うことによって深い

ものを伝えることができたのです。そういう文化が千年も千年以上も続いてきたわけです。抽象性に慣れた関西のもの言いがある。そして、抽象性だけでは計り知れないところの、即物的な関東のもの言いがあるのです。

戦後六十年も昔から、即物的な面、つまり写実的な面と抽象的な面を、そんなに真つ逆さまなものではなく、距離があるものでもなく、裏と表のものとして絶えず考えようとしてきたように思っています。

それでは戦後、短歌が発した昭和三十年代に革命といわれるほどの斬新な歌を作っていた、寺山修司の昭和三十三年に出された『空には本』の中から一首引いてきました。

ふるさとの訛りなくせし友といてモ
カ珈琲はかくまでがし
というのです。珈琲が苦いのは当り前で
す。苦いからおいしいわけで、苦いことを
知らない人はいない。この苦味をどうとる
かということでしょう。寺山はそこを「ふ
るさとの訛りをなくした友達がい」と
……。その友たちと喫茶店で向かい合っ

ているんですね。すっかり東京弁、標準語で話している。でも、寺山は一生青森弁を使っています。全部ではありませんが、寺山は東北の訛りをなくすことはありませんでした。それは自分の原点、生の原点であり、同時に自分の文化の原点である東北、三沢の訛りをもっていたということです。私は寺山のそういうところが大好きですね。いかなる場所でもしゃべる時も東北の訛りでしゃべった、こういう寺山がいます。自分は東北の訛りをなくさない。それが自分の生の原点であり、生活文化の原点だったからです。

そういうものをなくしてしまった友と東京で飲む珈琲。「モカ珈琲はかくまでがし」、珈琲が苦いだけではなく、ふるさとを、言葉の訛りまで捨ててしまった友を「苦い」と感じているのです。この友の精神、全部東京人になってしまおうなどという安っぽい考えをもった友だちを「苦い」と感じているわけです。これはすばらしいですよ。

私は、母方が京都で父方がなんと会津です。会津と京都の間にいるので、二股膏薬

のようです。京都にいと、さっきのように「一寸先は闇やなあ」と言うでしょう。こちらに来るとそうはいかない。「うだべか」などと言うんです。そういう二つの世界で育ったので、どちらの訛りを残しているのか、適当に両方が混ざって残っているので非常に困るんです。

同じ昭和三十三年に『日本人霊歌』という本を塚本邦雄さんが出しました。第三歌集だったかな。その中から一つ選んでみました。

突風に生卵割れ、かつてかく撃ちぬ
かれたる兵士の眼

これは怖いですね。寺山さんの比喩と塚本さんの比喩を比べてみると、関西の塚本さんの比喩に「関西かるた」の名残があるといったらおかしいでしょうか。「突風に生卵が割れる」ということがあるかないかわかりません。卵が山のように積まれているところに突風が吹いてきた時、その一個が転がり落ちて割れた。こういう場面がないわけではない。激しい突風に一つの卵の殻が割れた。その状況を「生卵割れ」と連用形中止法で切っているのです。ここで

読者が、生卵が割れた時の状態を空想するようにはできているのです、切れ目がありますから。どんな場面を空想するでしょう。

女の方は台所で年中やっているからおわかりでしょう。あの生卵が自身と一緒に、どろりと流れ落ちる。そのどろりと流れ落ちるイメージから、「かつてかく撃ちぬかれたる兵士の眼」と。単純な現実から恐ろしい現実結び付いているわけです。卵が割れた時の、どろりとした黄身の流れ出す姿と、戦争に行った兵隊が眼を撃ちぬかれ、目の玉がどろりと生卵のように流れ出るという、非常に残酷な情景です。もちろん血だつて流れたでしょう。ここでは、そういうどろりと流れるという怖い、抽象や即物的なものではありません。

昭和三十年以降の短歌の世界には、そこに「感覚」というのが入ってくるんですね。即物的なわかりやすい比喩、それに抽象的な深い恐ろしさが加わると同時に、あの感性に訴える。人間がもっている感性に訴える。この三つの点が入ってくるんです。この塚本さんの歌は、そういう感性に働きかけているのです。そのことによつ

て、戦争というものを怖気をふるうような嫌なものに思わせるといのが、この短歌を読んだ後の結果になっていると思えます。つまり、「かつてかく撃ちぬかれたる兵士の眼」という主題をイメージ化し、嫌な感性に訴えて、「生卵」の例を出してきているということでしょう。

私は女ですので、男の人の歌ばかりでなく女の人の歌をみてみましょう。私と同世代で、昭和三十五年に『不文の掟』という本を出された、大西民子さんの歌です。この人も東北の人です。

完きは一つとてなき阿羅漢のわらわらと起ちあがる夜なきや

「完きは一つとてなき阿羅漢の」、ここまでがイメージですね。完全なもの一つもない。目が欠けたり手が欠けたり、口が欠けたり、時には首がなかつたりする。そういう羅漢さんの集団がある。それを見るとなんだか無残な感じがするのです。身体がすべて欠け穿けている羅漢像の群落。それだけでも怖いのですが、そういう羅漢像が「わらわらと起ちあがる夜なきや」と。これは恐ろしいことですよ。こう言われて

みてぞつとするわけです。

私に近い年配の方が多く、思い出して下さればわかると思うのですが、昭和三十三年といえば六十年安保闘争の前夜のような時期です。ですから塚本邦雄さんや大西さんのこういう歌が出てきているのだと思います。

このように、今もなお通用する歌というのは、社会的な深いものや欠け穿けたもの、欠損をたくさんもっている人間というものを詠っているからでしょう。つまり、我々は完璧ではありません。お金がないとか職がないとか、これは欠落ですよ。今も様々な者がたくさんいるわけです。それを羅漢像をイメージして、たくさん欠損をもちながらやつと生きている人間がある夜わらわらと立(起)ち上がる。真つ直ぐに立ち上がるのではなく、わらわらと起ち上がる、立てない腰で、立てない足で、わらわらと立ち上がった時、これは「えい、えい、おう」より怖いじゃないですか。そういうものがやつと立ち上がる、そういう夜があるのではないかと彼女は想像しています。

そういうものが社会的な状況に響いていた時代が、この昭和三十三年から三十五年にかけてだったのです。

このようにして現代短歌は出発してきました。さっきの「いろはがるた」の関東と関西を合わせ、感性を加えたような形で出発してきたのです。そして、それがもともと成熟し、もともと面白くなる。面白さが加わってくるのが四十年代です。

四十年代以降の歌を読む

では、昭和四十年代から今日まで活躍してきた、または活躍している作家たちの歌を少し挙げていきます。最初は、口語短歌で一世を風靡し、現代短歌のイメージまでも変えてしまった、俵万智さんの歌です。

さくらさくらさくら咲き初め咲き終り
りなにもなかつたような公園

いい歌ですね。俵さんも少し大人になった感じがする歌です。

「さくらさくらさくら咲き初め咲き終り」、短いけれどもうまく言っています。「さくらさくら」と酔ったように言い出して、桜が

咲き始め、あつという間に咲き終わる。ここまででは誰もが知っている状況を、誰もが知っている言葉で述べています。そのあとがけっこう怖いのです。

「なにもなかつたような公園」、桜など咲いたことがなかつたような顔をして、いつものように公園がある。滑り台があつて、ジャングルジムがあつて、小さいブタちゃんやウシさん、ゾウさんがいて砂場もある。そういう、何にもなかつたような公園になつている。日本人の忘れやすさも思い出される歌です。

日本人は、事件があるとうわーっと騒ぎますね。桜が咲き初めて咲き散るまではワイワイとやっているけれど、散つてしまふと何にもなかつたような公園になつてしまふ。そして、次にいいことがないか、面白い話はないかと、次を求めるのです。そういう性格的なものをもっています。

この俵さんの歌は、「なにもなかつたような」というところが意外と怖い。政治でもそうです。社会的な事件でもそうです。戦争や原爆、今回の事故などはそうならないと思えますが、福竜丸のことだつて、や



はり長いこと我々は忘れていました。そして、「なにもなかつたような公園」の顔をしていたのではないのでしょうか。こういう歌を、その時は風景として読んでいたのかもしれないませんが、現在のように緊迫感がある時にこのような歌が顔を出してくると、我々は何もなかつたような顔をしてきたけれど、実は問題は山積していたのだということに思い至るのです。これは、やはり深さではないでしょうか。

この一首は、単純に万智さんが詠った歌だと思つていたかもしれませんが、実はわかりやすくとても深い歌なのではないでしょうか。それは、この下の句に思想があ

るからです。日本人というものをよく見極めて、日本人の生活史をよく考えています。すぐに何もなかったような顔をしてしまう日本人の頼りなさ、それを追求しています。そういうところがあるから、この歌の深さになっているわけです。

次に小島ゆかりさんの歌を読んでみます。らつきよりの歌です。主婦がらつきよを漬けることはよくあるので、これを読んでみたくなりました。これは二重写しという方法の歌です。自分のこととらつきよのことが二重になって見えている歌で、漬けているらつきよの向こう側に自分の姿が見えます。日本人は、こういう二重写しを万葉以来やってきました。そういう方法が、最近また復活しているのです。新しい方法ではない、むしろ古い方法です。

折り紙で「だましぶね」という遊びがあります。「ちよつとこつちを持って、目をつぶって」と。一瞬で折りを返して、つべんを持っているつもりが端っこだったとかです。

らつきよの上に泪のつぶ落ちて
らつきよは泣くわたしのことし

「らつきよの上に泪のつぶ落ちて」、自分が泣いているのです。泣きながららつきよを漬けています。なんだかわいそうな場面です。そして「らつきよは泣く」。「私は泣く」と一言も言っていないところがいいですね。らつきよが泣いている。

この「泣く」が「らつきよ」にも「わたし」にも、両方にかかっている。「らつきよは泣く。泣くわたしのようだ」となってくるわけです。

この「泣く」というのは「らつきよが泣いている、わたしの泪のつぶがらつきよの上に落ちると、らつきよの丸い頭からすうと泪のつぶが落ちていく。らつきよが泣いているようだ。いや、泣いているわたしのようだ」というように、らつきよが泣いているのか、わたしが泣いているのか重なってくるところが、面白い作り方になっています。

面白いというのは、現代短歌の一つの要素です——だいたい、面白くなければ文学じゃないのよ——。文学の良さというのには、面白さにあります。読んでいて面白いから文学が面白いのです。面白くないもの

はだめ。これを読むと、悲しい歌なのに面白いじゃありませんか。らつきよという映像が出てきて、らつきよの上を流れる泪があつて、そしてわたしも泣いている。

らつきよが泣いているのか、わたしが泣いているのか……。そういうところにこの作者の楽天的な性格もあつて、あるユーモラスな映像と作者の姿が出てくる。泣いているのに、読者をあまり悲しませない。でも、本質的には最初に泪のつぶがらつきよについているのだ、そういうことになっているのです。

次に米川千嘉子さんの歌を読んでみます。

お軽、小春、お初、お半と呼んでみる
ちひさいちひさい顔の白梅

「お軽、小春、お初、お半と呼んでみる」、さあ、これは人の名前ですが、若い人は知らないでしょうか。これは全部、浄瑠璃、歌舞伎に出てくる女の人の名前です。お軽の相手は勘平さん。小春の相手は治兵衛さん。お初の相手は知っていますか？ お初・徳兵衛。それからお半と長右衛門。いずれも、心中または夫のために死んだ女性

の名前です。

お軽・勘平というのは、赤穂浪士の荻野勘平。資金調達のために間違つて舅を殺したと思つて腹を切る、「勘平切腹の場」が有名です。女房のお軽はやはり資金調達のために、祇園に身を売ります。大野九郎兵衛は縁の下、お軽は上のほうから鏡で、大石良雄が手紙を読んでいるのを見る場面があります。お軽は貞節や、何よりも主家の資金調達のために身売りをしたのですが、大石の密書を読んだということによって、実の兄に殺されるという、非常に気の毒な運命の女性です。夫のために身を売り、主君のために殺されてしまったという、そういう二人です。北原白秋が「おかる勘平」というすばらしい詩を詠んでいます。昔から涙を誘つたお軽です。

小春と紙屋治兵衛は『心中天網島』でも有名です。紙屋治兵衛は、小春の馴染みの客となつて、身代を傾けるばかりに小春に力を注いでしまいました。女房のおさんが小春に訴えます。このおさんというのもいい女で、「うちの人のため、紙屋のために身を引いてくれ」と、小春に頼むわけ

です。そして、小春が愛想尽かしをする場面がたいへん有名です。この『心中天網島』は、結局小春と紙屋治兵衛が心中に道行きをする。女は恋のために命を捨てるのです。女房おさんとの間に挟まれた、苦しい苦しい小春が身を捨てました。

お初・徳兵衛というのは『曾根崎心中』です。醤油屋の手代、徳兵衛と遊女お初は恋仲でした。ところが九平次という悪友の策略にはまってしまい、この策略の前に二人はお金を遣い、曾根崎で心中しなければならなくなつてしまったのです。

お半と長右衛門は『桂川連理柵』という歌舞伎で有名な演題です。長右衛門さんは三十八歳、お半さんは十四歳、三十八歳の男と十四歳の女との恋の話です。これも、お絹という非常に貞節な女房が出てきます。この三人の関係が纏まとれていき、三十八歳の長右衛門と十四歳のお半が心中をするわけです。

そういう江戸時代の、悲劇の女の名前を「お軽、小春、お初、お半と呼んでみる」——そうすると、それらの女の顔を、どのような女として表現したらいいのか、「ち

ひさいちひさい顔の白梅」というのが、そのイメージです。心中した江戸時代の不運な女たちの顔を思い浮かべようとすると、小さい小さい白梅なんです。「小さい小さい顔をした白梅が思い出される」ということです。この「ちひさいちひさい」というところと「白梅」というところで、江戸時代のそういう女を悲しんでいるように思います。ひらかれなかつた女、自立できなかった女、自我がなかつた女、そういう江戸時代の女を批評すると同時に、慈しんでいる。現代が失つてしまった、女の純情や純愛というものにも思いがいきますね。

「ちひさいちひさい顔の白梅」、来年の白梅が咲くころになったら「お軽、小春……」とそれらの名を呼んでみると、そこに江戸時代のかわいそうな、しかし純情な心を持ち死んでいった女たちの顔が浮かんでくるかもしれません。そういう、具体的な歴史、日本の女の歴史というものを考えています。女の生活史、あるいは恋の歴史というものがあつたわけです。そういうものに対する批評も歌で詠える、女性史に対する自分の考えを歌で詠うことができるとい

う、非常に大きなテーマを詠んでみせた一首だと思えます。しかも、それは単なる理屈ではなく「ちひさいちひさい顔の白梅」ということよって、叙情的な感性の柔らかな歌になっていると思えます。

口元の笑う遺影の拡大は無数の黒き点ドットがわらう

怖いですね。吉川宏志さんの歌です。

これは、知覧とか靖国神社などに行つて、戦争中に亡くなった兵隊たち、十六歳から十八歳ぐらいで亡くなった特攻隊の若者の写真を見て作った歌です。この歌は知覧です。口元は笑っている遺影、微笑を含んでいる遺影なんです。

ところが、それを拡大してみると、それは黒い点ドットなのです。新聞写真などはことにそうですけれど、黒い無数のドットが笑っているのだという、「黒い」が効いていて怖い感じがします。影のようなドット、水玉ですね。「黒い点々が笑っているよ」、これは肉体をもった遺影なのか、黒いドットの塊なのか、いや肉体をもった人間が黒いドットの塊として、今ここに残されている。今、特攻隊のことを見て恐ろしく思

い、悲しく思い、それもまた悼んでいる。黒いドットになってしまった特攻隊を悲しんでいるという感じがします。

ホットな三歌人の歌

いちばんホットな話題として、今年受賞した三歌集があります。一つは迫空賞を受賞した。島田修三さんの『蓬断想録』という歌集です。「蓬がモヤモヤしたような年だった」と六十歳代の島田さんはおっしゃっていました。島田さんの歌はわかりやすいです。

白ブリドモウ乾酪モウのかけら齧りつつ酌む宵を
前立腺はしずかに太る

「ブリドモウ」というのは白カビのチーズです。「白ブリドモウ乾酪モウのかけら齧りつつ酌む宵を」、島田さんは大酒飲みですから、もう一杯飲んでいるのでしょうか。このチーズを齧りながら一杯飲んでる。「うまい、楽しい、実にいい晩だ」と思いながら、そういう夜に限って「俺の前立腺はしずかに太る」というのです。心当たりの人がいらつしやるのではありませんか(笑)。「前立腺

はしずかに太るけれど、この酒とうまさを忘れることができようか」、そう言つて飲んでる作者がいます。

そうかと思うと、この方は今年の四月から名古屋の淑徳大学の学長を務めています。偉い人なのですが、まだそうではない時の歌です(笑)。

おいそこの学部長、寝てんちやねえ
よとわが言はざれば静かなり会議

言いたいけれど言わない。言いたい言葉は「おいそこの学部長、寝てんちやねえよ」。叱りたいけれど、そんなことを言つたら会議はどうなるかわかっているから、言わない。「わが言はざれば」、そうは言わない。でも学部長は寝ている。癪にさわつてしようがないけれど私は言わない。だから会議は静かだ。言つたら大騒動。でも、いつも自分はどういう矛盾を抱えて会議を主催しているのでしょうか。これは、日本人のある程度の人が体験していることですよ。ね。「あいつは会議が始まると寝ちゃうんだよな」とか「仕事をこなしている」とか、会議の中ではろくな人はいませんね。私も時々やっていました。そういう時

に、それを見ている人が「寝てんじゃねえよ」とか「内職するな!」とか、「言はざれば静かなり会議」なのです。日本の、一つの会議の現場を抉り出しているとともに、そういう無駄な会議はやらないほうがいいのか、あるいは会議で寝るべきではないのか、様々な会議の現場を思い出させることで、この歌はある批判力を持っていると同時に、痛快で面白い。

一首目も「我が前立腺がしずかに太る」というところで笑っちゃいます。これが単なる面白さなのかというと、万人に共通している、多くの場面に共通しているものなのです。それが日本人の性格であり、日本人の社会的な困った面であり、そういうところを批判しているわけです。行為を通して、こういう人間をどうするのか。知性だけでは超えられない、理解できない様々なこと、人間とは本当に不可解なものだと思わせるものがあるわけです。

祖父といふ怪しきものに俺はなり仔
犬のごときを懐ふかく抱く

「おじいちゃんなんてものに、もうなっちゃったんだよ」、今は五十歳ぐらいでおじ

いちゃんになる人はいっぱいいますね。「祖父といふ怪しきものに俺はなり」、とうとうじいさんになってしまった、孫が生まれればじいさんですからね。

「孫」と言わないで「仔犬のごときを懐ふかく抱く」と言ったところがせめてもの皮肉なんですね。まだ人間だか獣だかわからないような、仔犬みたいなチビを懐深く抱いている。大満足ですよ。

これを読んで、おじいちゃんが大満足していないかと思ったら大間違いで、大満足で仔犬のようなわけのわからないものを懐に抱き、じいちゃんと呼ばれなければならぬ悔しさを噛み締めている。大満足の悔しさですね。

次は、小池光さんです。小池さんは今年、小野市詩歌文学賞を受賞しました。小池さんは、また少し違った心性な詠い方なんです。

夕暮れに雨戸を鎖すはいつまでもさ
びしき仕事その音きこゆ

非常に感覚的な歌です。夕暮れに雨戸を閉ざす、そういう仕事、仕事というより主婦がやったり夫がやったりすることです。

夕暮れになり、日が暮れてくるあの明るさ。人間と狼の間といわれるあの夕暮れの光線の中で、雨戸を閉ざす。うちの雨戸はガタピシしていますが、スーッと通る雨戸かもしれない。とにかく、自分の家というものを雨戸で全部閉じ込めてしまう、そのことを考えるといつまでも寂しい仕事だということです。

開放している窓や雨戸を、全部閉ざして夜を迎える。密閉した家というものの中に自分を存在させる。思えば、いつまでも寂しい仕事だ。その音があちらからもこちらからも聞こえてくる。夕暮れの寂しさというものを風景から出すのではなくて、家のガタピシとした戸を閉ざすことから出してくるという、この辺りが実にユニークで面白いのです。人間の寂しさを、感性的に捉えているのではないのでしょうか。

夕暮れから夜になる時の、ふっと一日が終わってしまったような寂しさというものが、雨戸を閉ざすというところに凝っているような気がします。

白犀といふほど白からず黒犀といふほど黒からず ただ風の中

「白犀といふほど白からず」——なるほど、白犀は真っ白ではありません。「黒犀といふほど黒からず」、たしかに黒犀も灰色に少し黒っぽいのがかかったぐらいだと思えます。白犀、黒犀と名づけられているけれども、いずれも白くもなく黒くもない。その二頭が、ただ風の中にのたりと立っている。犀という大きい生き物の存在というものが、ただのつそりと立っているだけなので、風の中に二頭の犀という大きな生き物ですが、人間はその一頭を白犀と呼び、一頭を黒犀と呼んでいる。でも黒でも白でもない、犀には関係ない呼び名よと言っているわけです。犀に關係なく、人間は勝手な名前をつけている。でも犀は白でも黒でもなく、一つの存在としてただ風の中に立っているよという歌です。これは、島田さんのくつきりとした批評精神ではなく、やんわりとした人間の不可解な名づけ方や、人間の不可解な、ある瞬間の寂しさというものを抉り出すような手法で、ある点を捉えて詠っているわけです。

それぞれの椅子にすわりて吾と妻と
ほろほろ鳥のたまごを食ふも

当たり前前のわかりやすい歌です。どこが面白いのでしょうか。一緒に座れませんので、それぞれの椅子にテーブルを挟んで座って、吾と妻はほろほろ鳥の卵を食べている。ほろほろ鳥の卵というのは、普通の卵よりも少し大きな感じがするし、味も苦みがあるような臭みがあるような、どこか違う感じがします。今日、この会場に来る前に「ほろほろ鳥の卵売ります」と書いてある看板を見ましたよ。そういう、ほろほろ鳥の卵を食べる。私は別に、ほろほろ鳥でなくても、普通の卵でかまわないと思うのです。どこがどうなんだというと、「それぞれの椅子」というところです。ここが大事な点ですね。

夫婦であるけれど、もう四十年もやってきた夫婦であるけれど、それぞれの椅子に座っている。思えば、同じ物を食べている。ほろほろ鳥という特別な卵を食べているのですが、それぞれの椅子に座って特別な物を食べているので、たとえ金婚を迎えた夫婦であるとしても、結局それぞれ、だということなのです。

人間は個、夫婦であっても一個。それぞれ

れの椅子しか人生にはありません。人生にはそれぞれの椅子しかない。その人生のそれぞれの椅子に座って、せめて同じほろほろ鳥の卵を食べているわけなのです。こういうところに、小池さんの一つの人生観があるわけです。

人生をどう見るか、犀をどう見るか、雨戸を鎖す仕事をどう見るかというところのどれにも、何かシーンと寂しい人間の人生、それが感覚的に感じられてくるところに、小池さんの歌の特色がある。人間や世事を客観化した時の違和感もありますが、「ああ、やっぱり人間はひとりなんだ」と思わせるところがあります。そこが文学、それが文学だと思っております。

三十歳前後の光森裕樹さんは、今年、現代歌人協会賞を受賞しました。非常に若い、現代の青年はどういうことを考えているのでしょうか。

カーテンにつつまれて知る教室の外
でも内でもあらぬ空間

なるほどと思うんです。「カーテンにつつまれる」というのはどういう場面でしょうか。教室にカーテンが下がっているかもしれ

れないから、それをぐるっと体に巻きつけたのかもしれない。けれど、それなら教室の中ですね。これは多分、保健室ですよ。保健室のベッドの周りにはカーテンがあるじゃないですか。あの中に包まれているのでしょうか、頭が痛いとか、お腹が痛いとか嘘をついたのかもしれない。保健室のカーテンに包まれてそこに横たわった時、初めて知るのです。教室の外でもない。教室の中でもない。この安らいだ守られた空間よ。この保健室のベッドというやつは学生、生徒にとつていちばんの安息の場所なのですよね。

私も教員を長いことやっていましたが、一人姿が見えないと思うと、だいたい保健室のカーテンを開けると寝ていたものです。「どうした?」と聞くと「頭が痛いです」などと、嘘に決まっていることを言う。あそこが安らいだ空間なのです。これは体験でしょうね。

ドアに鍵強くさしこむこの深さ人ならば死に至るふかさか

「ドアに鍵強くさしこむこの深さ」、今は大きい鍵もありますよね、ドアにぐくぐく

つと差し込む。旅館などに泊まった時、鍵の長さはまさに深いですね。ここまでは私たちも年中経験します。そして「開いた」とか「開かない」とか、もがいています。ところが、今の若者というのはこう言うんです、我々の考えの及ばないことを考える。「人ならば死に至るふかさか」と。怖いと思いますね。もしこれが刃物だったら、死に至る深さだと。ぐつと差し込んで決っているんですよ、回して。日常の中の怖い風景を、この人はひそかに発見したのです。

みなもより落葉ひとつみなそこへ落ち
ちなほしゆくさまを見てあつ

若者は、シビアで本当に怖いことを詠みます。水の面に落葉が散った。それは梢から落ちてきた。いいですか、「落ちてきた」のです。落ちてきて水面に浮かんでいたのに、そこからまた水を吸って重くなり、さらに水底に落ち直していく。

人間は、生活や社会など様々なところで落ちることがあります。学校だって点数が悪ければ落ちますね。例えば、私は数学がだめだったから、四十点まで落ちたとしま

す。でも、そこで「まあいいか」と思ったら、そこから落ち直して二十点になるということもあるわけです。

現代の人間の運命も、落ちて、そこならまだ良かったのだけれど、さらに落ち直すということがあるのです。現代の厳しい世の中では、いったん落ちたけれど落ち直してしまう。それを、木の葉っぱを風景としながら、一枚の葉っぱが落ち直していくさまを終わりまで自分はじっと見ていた。つまり、落ち直す木の葉っぱに、作者は一つの人生を見ていた。人生って怖いと。

この人はまだ三十歳ぐらいですから人生をあまり経験していません。でも、人生には落ち直すということがあるのだという恐ろしさを、そこに見直したわけなのです。

今日お話ししたことは、日本の「いろはがるた」で既に二つのスタイルが出てきていたけれど、それに単なる象徴や比喩だけでなく、自分の感性や人生観、批評精神などを加えて、現代短歌はもう一つ深いところを目指しながら作られているというところを申し述べました。ご清聴、ありがとうございます。